

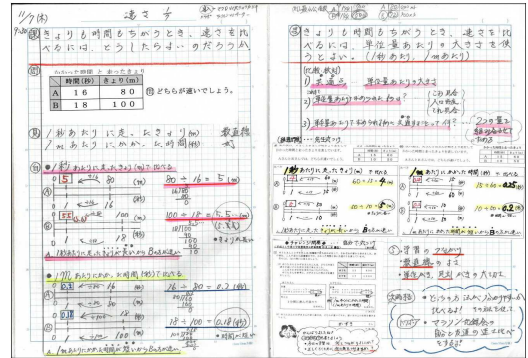
## ねらいの達成に向けた、「つなげる授業」の実現のために

八峰町立峰浜小学校 教育専門監（算数・数学） 藤谷 順子

算数・数学の学習では、新たな課題解決のためにどんな見方・考え方を働かせ、どんな力（資質・能力）を使うと解決できるのかを、子どもたち自身が気づき、主体的に解決していけるように授業構想している。そのために、以下の3つの“つなげる”を心掛けている。

### ○具体的な取組 (1) 既習とつなげる

本時で児童に身に付けたい力とは何か、そのために働かせなければならない数学的な見方・考え方は何かを考え、単元を通したノート型指導案を作成し授業構想している。本時で使う既習内容、予想される児童の解決方法やつまずき、ゆさぶりの発問、確実な力とするための練習問題等を考え、授業に臨んでいる。授業者自身が学年の学習内容の系統性を理解していることが大切で、系統性を知っていることで子どもが気付くための発問をすることができ、次へとつなげる発問や言葉掛けができる。授業後には、児童の反応や問い、つまずき例などを書き込み、次時につなげるのはもちろん、次年度のノート型指導案作成に生かし、授業の質を高めることで児童に還元できるようにしている。



↑ ノート型指導案

子どもたちは、既習内容を使って解くことができた経験を積み重ねていくと、「ここであれが使えるかも」と、見方・考え方を自発的に働かせて主体的に学習するようになっていく。そして、既習とつなげることの大切さを実感していくことができると考える。

### (2) 考えをつなげる

学び合いでは、既習事項を生かして課題解決した「思考の過程」を交流するようにしている。ねらいに迫る学び合いにするために自力解決で見取るようにしているのは、「解けた解法のパターン」「つまずきやすいところでの誤答」「途中で悩んで進めないでいるものやその子どものつぶやき」「解けてはいるが友達と比べたら違った答えになって悩んでいる場面」などである。どの考えを、どの順番で、どのような提示の仕方を取り上げるか、どんな切り込んだ発問をするかなど、考えをつなげるための構想を瞬時に考えなければならない。そのため、自分の判断力が試されるこの時間は、時間との闘いでもあり、もっとも緊張する時間である。



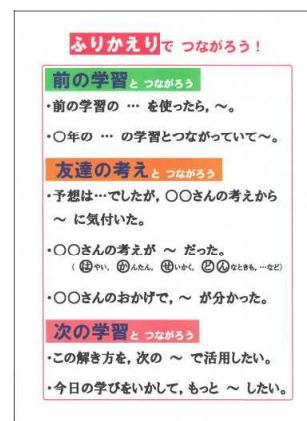
その後の全体での学び合いでは、図や表、式などを関連付けて説明する中で、なぜ間違いに至ったのか、どう考えたら正答になったのか、つまずきやすいポイントは何かなどを明確にしたり、比較・検討の視点からよりよい解決方法を導き出したりする時間としている。

学び合いの後には2分程度のノートタイムを設けている。子どもたちが学び合いで他の思考過程に触れたことで、学習課題について再考し、深い学びにつなげられるようにするためである。全体で聴いて分かったつもりになっているかもしれないところを個に戻し、自分と対話することで、学びを自覚するための大切な時間と考え、ノートをとる時間を設けている。

### (3) 振り返りでつなげる

本時で「何を使ってどう解いたか」「身に付いた力が何か」を子ども自身が自覚し、次の新たな課題解決の際に、その力を活用・発揮するための振り返りになるように心掛けている。学びをつなげる振り返りの視点は、子どもたち自らが前後の学習内容や他の考えと関連付けながら学びを積み重ねていくことができるようにと願い、年度当初に提示し、いつでも他教科でも活用できるように、カード化している。

振り返りでは、子どもが無自覚で活用・発揮させていたかもしれない身に付けている力をしっかり自覚できるようにしたいと考え、意図的指名により価値付けている。また、児童のノートは回収し、身に付いた力の活用・発揮状況や振り返り記述を確認し、褒めて認めるコメントを書いている。そうすることで、個々の振り返りの質が向上し、次の学習への意欲が高まり、主体的な課題解決へとつながっていくと考えている。



↑ 振り返りの視点